



令和7年2月吉日
発行責任者 藤野 宣之

北里大学小児科同窓会会報 Vol.29



小児科同窓会総会 2024.6.15 レンブラントホテル

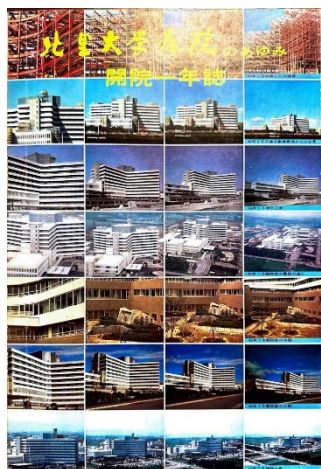
小児科同窓会への思い

大山 宜秀



以前、巻頭言を執筆したことがあるため、昔話を書くのはお許しいただきたいと一度はお断りしましたが、是非とのご要望により、高齢者に免じてお許しいただきたいと思います。家の片付けをしていたところ、1枚の古い写真が見つかりました（写真左）。それは昭和45年秋、北里大学病院が新設される際に研修先の見学に訪れたときのもので、河西先生と山岸先生が写っており、撮影者は三浦先生です。背景には建設中の旧北里大学病院が映っています。翌年の昭和46年7月26日に病院が開院し、その日が小児科誕生の日であり、私の小児科人生の始まりでもありました。北里大学小児科の

スタート時の常勤メンバーは坂上教授、山岸、三浦両助教授、河西、三原、小島病棟医それと私のわずか7人でした。医学部創設期の功労者であり、初代小児科学教授の坂上正道先生は、大学病院の一部門という枠を超え、遥かに大きな小児病院とも言える規模の小児科を設立されました。小児病棟は、総合病院を基礎として乳児・幼児・学童という単位に分け小児の特性に合わせて機能し、内科系だけでなく、外科系も含むものでした。産科と小児科の枠を超え、分娩から新生児までを一貫して管理する母子センター構想もあり、1ヶ月検診は小児科医が担当することが当然とされました。また外来機能についても、小児科医がおのこの専門分野を持ちながら、小児を全人的に捉えるという考え方でした（同窓会報6号）。当時としては斬新かつ、画期的なものでした。小児医学・医療の本物を形に表すとする先生らしい考えに基づいていました。このように地域の中心的医療機関としての機能と医学教育機関として高い目標を掲げて診療内容の充実が図られ歩んできました。



開院してから年月が経ち、教室員も増えてきた頃、坂上先生が「同じ釜の飯を食べた仲間が集う同窓会を設立しよう」と提案され、急遽同窓会が発足しました。当初は皆が集まりやすいという理由で忘年会と一緒に開催されていました。同窓会員の中には教室で学び、研修を終え、さらに発展し、各地方で実地医家として、また研究・医育機関等で活躍されている方々があります。半世紀を経て、最近では、会員数は約240名に達しています。小児科同窓会の役割は、北里大学小児科の診療・教育・研究での大いなる発展のため側面より応援することにあります。そこで三浦会長の提案で平成20年9月北里大学医学部小児科同窓会基金が設立されました。北里研

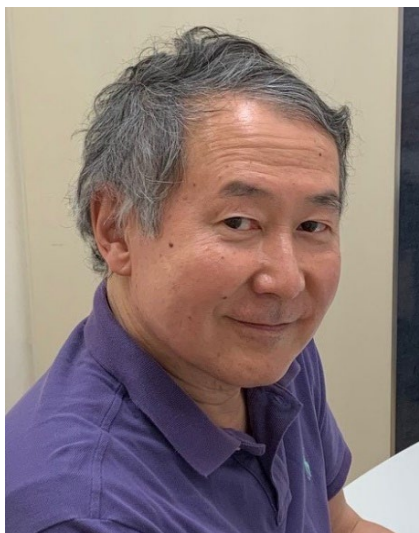
究所に寄付をすることで、税法上の寄付金控除、基金の管理費免除が認められる方式としました(最近後者は認められなくなりました)。研究所との手続きで助言をいただいた医学部長であった友人の相澤先生曰く「各科でこのような応援ができるといいですね。将来寄付行為が広がっていくことを期待します。よい先輩方がおられ羨ましい限りです」と語っていました。多くの会員諸先生方に寄付金のご賛同をいただきました。今後もこの制度が持続的に活用され、小児科の更なる発展に寄与することを願っています。

最後に、設立当時の理念を忘れずに素晴らしい歴史、伝統が継続され、さらに発展することを期待しています。昨年、診療所を閉院し、50余年に亘る少々大げさかもしれませんが北里大学小児科とともに歩んできた私の小児科医としてのキャリアは終わりました。

会長挨拶

あつという間の2年間

藤野こどもクリニック
院長 藤野 宣之 (6回生)



小口先生から同窓会長を引き継いでから早くも2年が過ぎました。この間、会員皆様から多くのご理解をいただきましたことを、深く感謝申し上げます。

就任後の目標に掲げた、同窓会執行部・理事会の世代交代に向けた動きも何とか形を成し始めたのではないかと感じています。もう一つの目標が、同窓会活動の活性化ですが、こちらはまだまだ十分とは言えません。会員の皆様がより興味を持って頂くためにはどのような活動が望ましいか、現在も理事会で検討しています。例えば卒

後年度ごとの同窓生が、交代制で総会・懇親会を一緒に企画運営するのは如何でしょうか？ 2025年は役員交代の年になりますが、卒後10年前後の医局在籍中の先生が多く評議員に参画し、大学の現状をリアルタイムに同窓会運営に反映できるようになれば、より新しい同窓会のかたちが生まれるのではないかと期待します。

さて2024年を振り返り、小児医療事情の変化に改めて気づかされました。

現在担当している医師会や保健審査委員会の業務から、医療費に対する締め付けが厳しくなっていると感じます。財務省は、医療費の削減に最も単純で確実に効果をもたらすのは、医療機関への受診回数を減らすこと、と考えているようです。また処方薬の制限も厳しくなり、例えば今までタミフル投与後、飲めなかった場合にリレンザの追加処方はいずれも認められましたが、昨秋から2剤処方はずべて査定されます。アドエアも50と100以外は全て査定されます(神奈川県)。また最近では新たな医療機関の設置形態が出現しています。フランチャイズ契約、複数登録制医師の交代業務、365日早朝から夜間まで診療する診療所が、近隣では海老名に続いて相模原にも開業されました。小児人口・小児科医も減っている現状で、医師の集約化は財務省の誘導かもしれません。

私事ですが医師会関連の話題として、昨秋『健やか親子21 内閣府特命担当大臣表彰』を受けました。子供・妊産婦に対する公衆衛生的取り組みへの評価とのことです（各県1~2人）。通常医師会の理事に長く従事するとこのような表彰は順番に回ってくるものですが、今回新米理事でありながら受賞できたのは、昨年【不治の病を昔話に・早期発見で広がる未来】というタイトルで拡大マスキングや Spot Vision Screener の早期実施を訴えたこと、その後早期に相模原市から予算の補助や実践への対応がなされたという実績を、医師会の先生方が印象強く推薦状に記載して下さいのおかげです。その元を辿れば、たくさんのデータや資料を提供頂いた野々田先生をはじめとする同窓会の皆様のご好意と日頃の診療努力の賜物です。同窓の皆様や地域の方々より、貴重な情報や恩恵を頂けたことが、何よりの幸せと感じております。

さて、筆を置こうと思ったところ、嬉しいお知らせが届きました。

副会長の松浦信夫先生が北海道医師会賞・北海道知事賞を受賞されました。先生は北海道に戻られた後、1型糖尿病を発症した15歳未満患者391名を約36年間追跡調査し、リスク因子に応じた死亡率傾向を英文ジャーナル（Diabetol Int. 2024年8月6日;15(4):870.）に報告されました。数10年にわたる研究成果は、松浦先生のたゆまぬ探求心と努力の賜物であり、今回はその業績と地域保健への貢献が称えられた名誉ある受賞と拝察します。同窓会からも改めてお祝いを申し上げます。また、次号に松浦先生からご寄稿をお願いしたいと考えています。

今後も同窓生の方々のご活躍を期待し、同窓会活動の充実を目標とし微力ながら貢献してゆきたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

北里大学医学部小児科学 教室近況

令和6年を振り返って

北里大学医学部小児科学
教授 石倉 健司



北里小児科責任者の石倉です。恒例となりますが、まずは令和6年の北里大学小児科を振り返りたいと思います。今年はいったん病院内のマスク着用も任意となり、平時が戻ってきたことを強く実感させられた一年でした。（その後インフルエンザ等の流行でまたマスク着用となりましたが…）

令和6年4月には、4人の仲間を迎えることが出来ました。2人が北里大学出身で、残り2人が外部から北里の門を叩いてくれました。常々、多様なスタッフが集まることを期待しており、今年も個性と活力あふれる人材が加わってくれました。今後彼らがどの様に成長していくか、是非皆さんに見守りつつ応援していただきたいと思います。恒例の新人紹介のページも是非参照ください。

コロナ禍は一応の収束を見ましたが、感染症は小児科の主要なテーマであり続けています。皆様ご承知の通り、コロナ感染も常に認められ、並行して手足口病、溶連菌、マイコプラズマ、インフルエンザと続きました。ワクチンの話題も常に小児科の主題であり続けています。さきに述べまし

たように、マスクまで復活となり…今後も感染症に関しては、常に感度を高くして取り組んでいきたいと思っています。

学会活動は、完全に新しい時代となったと感じています。現地参加が標準となりつつも、規模や目的によって On-line や Hybrid も選択肢になっています。また大きな学会で、AI を使った同時通訳が活用され、言語の壁も少し低くなったかも知れません。いずれにしても若い小児科医が、学会参加やそこでの発表、人材交流を通して、成長して欲しいと切に願っています。効率的に Web 参加を活用し知識の吸収に努めるのも良いし、現地参加して人材交流を図るものもまた大切だと思っています。

自分が着任後に始めた Kitasato Pediatrics *-Meet the Professional-* も今年 2 回開催しました。100 人を超える参加者があり、非常に手応えを感じています。また 465 回！を数える相模原市小児科医会月例懇話会も、緒方会長の力強いバックアップを受けつつ平田先生のマネージメントの元開催しています。さらに第 89 回関東小児腎臓研究会や第 45 回日本小児体液研究会の開催も当科主導で行いました。このように医局が中心となって学会、研究会活動を行う事は、この医局の活性化に確実に結び付くと考えており、今後も積極的に進めていきます。

さて昨年も少し述べましたが、自分が北里に着任して 5 年が過ぎました。着任して以来、常に人材獲得と教育を最大のミッションとして活動してきました。まだまだ人材確保は道半ばですが、一方で今のメンバーで北里小児科の発展を目指す時期に来ていると思います。昨年も「大学らしい研究活動を」と述べましたが、引き続き小児科を挙げて模索していきたいと考えています。一例として、当科の HP に研究成果や公的研究費の取得状況が掲載されています。是非現在進行形の当科の研究について、ご確認ください。

最後に私事ですが、今年は私にとって一つ大きな出来事がありました。国際小児腎臓学会 (IPNA) という団体があり、3 年毎 (今後 2 年毎) に学術集会が世界各国で開催されています。この学術集会は小児腎臓病の分野で最も重要な会であり、日本では一度 1986 年に開催されています。その際は北里大学教授の酒井糾先生が中心になってご尽力されました。同窓会の先生も、たくさんの方々が関わっていらっしやっただと思います。しかしそれ以来日本では開催されず、ここ数年日本小児腎臓病学会では、石倉が招致委員長となり、1986 年以來の日本開催を目指していました。そしてついに今年の 9 月にスペインバレンシアで最終プレゼンがあり、大変幸運なことに 3 都市の中で日本が選ばれました。その結果、2027 年に京都で 41 年ぶりに開催することになりました。ポスターを掲示しておきます。2027 年春に、是非一度京都にいらっしやっただけですと幸いです。

同窓会の方々には日頃から我々小児科を応援くださり深く感謝しております。また小児科の活動の根幹は若い力の加入と、彼らへの教育です。その点につきましても同窓会の方々に、基金という形で多大なご支援を頂き本当にありがとうございます。今後も我々北里小児科への変わらぬご支援を頂ければ幸いです。



追悼 遠藤 紀雄 先生

「 遠藤先生を偲んで 」

阿部・島本小児科内科医院

島本 由紀子（1 回生）

遠藤先生との初めての出会いは、私が5年生でのベットサイドティーチングの時でした。その出会いは、とても衝撃的なものでした。先生は、その数週間前にアメリカから帰国されたばかりの颯爽とした新進気鋭の Dr. でした。そのベットサイドティーチングは、今まで受けていたものとは異質であり、診断に至る為の理論的プロセスの進め方は実践的であり、かつ豊富な知識に裏付けされた思考は緻密であり、とても刺激的なものでした。でも反面、その時間は濃密ではありましたが、緊張感が強く恐ろしいものであったことを覚えています。そんな格好いい遠藤先生に憧れて、卒業後は先生の下で小児の悪性腫瘍を勉強したいという思いを強くいたしました。先生は慶應大学の医学部卒業後直ぐに1年間の横須賀の米軍病院で研修し、その後クリニカルレジデントとしてミシガン大学に留学され、シニアレジデント、フェローになられ、坂上先生に請われて北里大学へと赴任されました。しかし、私がレジデントになって、まもなくご家庭の事情で大学を辞してクリニックを開業され非常勤講師として1回/週、血液・悪性腫瘍の子供達の診療にあたられました。私達も、その1回/週の限られた時間内に血液標本の見方や患者様たちの治療等につき指導を受けていました。しかし、疾病の特質上、1回/週の関与では、私達にも不消化な不満が残り、遠藤先生にも忸怩たる思いがあったのではないかと推察されることが時としてありました。私達のような経験の乏しい医師が悪性腫瘍の子と親に向き合う事は、精神的には非常にきつく、時としてどうしても感情移入し過ぎて自分自身を追い詰めてしまう事が多々ありました。そんな時は、遠藤先生に「僕達は家族ではないんだ。医療者であるという視点を忘れないように」とよく注意をされました。それは先生が、それまでの長い期間、真剣に悪性腫瘍の子どもたちにかかわってきた上に導かれた思いだったのだと思います。「親・子に寄り添いながらも、情に溺れずに冷静に医療者としての目をもって事に当たらなければ医療はできないという事を。」どんな事を言って反発しても、いつも懐深く受け入れてくださった遠藤先生。医療者としての冷静な目と懐の深さを教えてくださった遠藤先生は、いつまでも私のボスです。 合掌。



「最後の手紙」

JCHO 相模野病院

小児成育医療センター主任部長

今井 純好(8回生)

遠藤先生には私が小児血液腫瘍を専門としたときからお世話になりました。また若輩でその専門の責任者となった孤独な私をいろいろサポートして下さいました。そのサポートがなければ(他にも多くの先生にサポートいただきましたが)私は専門を続けることはできなかったと思います。大学の外来を辞されたあとは年に何回かのお手紙のやりとりになりましたが、文面からお元気な様子を伺い知る事が出来ました。今年の7月にもお葉書を頂き「私の頭と体力を維持するためと、私でないにだめだと言う患者様たちのためにまだ診療所で働いております」とお元気そうでした、それなのに…。

9月2日仕事から戻り自宅のメールボックスをあけると、見覚えのある筆跡で私宛に書かれた封筒がありました。差出人は思った通り遠藤先生でした。少し気になったのは差出人に奥様の名前と一緒に書かれていた事です。封をあけるとそこには自筆で、私との関わりの中での思い出や、そのことに対する謝辞などが綴られていました。そして、

「遠藤紀雄は8月15日に逝去しました、葬儀は家族葬で行う予定です」としてあつたのです。私は何が起きているのかわからず戸惑ってしまい、小児科の先輩方に連絡してしまいましたが、状況がわかる事はありませんでした。しかし翌日同窓会から訃報の知らせが来て、「遠藤先生は本当に亡くなられてしまったのだ」と認識し、寂しくてたまりませんでした。そして改めて手紙を読み返すと、そこには先生が誇りをもって歩まれた道のりと、奥様への感謝が綴られていました。あのダンディーな先生が失恋に失恋を重ねやっとうろってくださったのが奥様であり、その奥様をずっと愛し続けたと。やはり最後まで先生はダンディーでした。その後小児科の先輩、友人と手紙のことを話すうちに、私なりに整理がついてきました。「遠藤先生は私にお別れをしてくださった、いつものようにお手紙で」と。それが最後の手紙になってしまいましたが、ありがたく思い、大切にしていきます。

遠藤先生本当にありがとうございました、ご冥福をお祈り致します。



私をサポートくださった遠藤先生(右)と堀池先生(左)

活躍する同窓生の先生から

世界保健機関カンボジア国事務所 予防接種担当技官



飯島 真紀子 (28 回生)

以前2021年8月に寄稿させていただいてから、3年4ヶ月が経ちました。2021年11月にベトナムからカンボジア国事務所に異動し予防接種担当を続けています。この国に来て、激動の歴史をまざまざと体感し、更には自分の了見の狭さを実感するばかりの3年です。なぜか。

まずカンボジアについて。12世紀、カンボジアは現在のタイ、ベトナム南部、ラオスに及ぶ東南アジア最大のクメール王朝を築き、かの有名なアンコールワットやアンコールトムなどの寺院を建設し栄えました。その後隣国や欧国の侵略を受け衰退し19世紀にフランス領インドシナに編入されます。第二次世界大戦で一時日本軍が進駐、1953年にシハヌーク殿下が独立を果たしますが、ベトナム戦争激化とともに1970年アメリカの傀儡政権のクーデターでシハヌークは中国に亡命。1975年にベトナムサイゴン陥落と同時にカンボジアを支配したのが原始共産主義を掲げたポルポト一派でした。彼率いるクメール・ルージュは知識層の虐殺を始め、ついには自国民の3割近くの150万人以上が殺戮された暗黒の恐怖共産制が1979年のベトナム侵攻まで続きました。ベトナムは世界の非難を受け1991年のパリ和平協定で撤退し、1993年にシハヌーク殿下が亡命先の中国から戻り、第一回民主選挙が実施されます。1998年から25年間、ポルポト一派から離反しベトナム侵攻とともにカンボジアに戻ったフン・セン首相のもとほぼ一党政治をしき、昨年息子に首相の座を譲りました。日本政府は内戦後から継続して地雷撤去、インフラ整備、人材育成などの支援を行っています。

と、いうことで。現在の政府、仕事相手である保健省上層部、WHOの同僚や運転手さんたちは、このなんとも複雑な怒涛を生き抜いてきた人たちなわけです。この国の人たちはとても強く、誇り高く、注意深い。たった20-30年前まで混乱の中にあったこの国は、今は首都プノンペンやアンコールワットのあるシェムリアップを中心に急速に発展し、新しい建物が次々と立ち、一見平和で穏やかな人々の中に、漆黒の闇と深い傷を抱えているのが垣間見えます。富裕層と貧困層の格差が広がり、高層ビルのすぐ横で日雇い労働者のスラムがあり、タイに出稼ぎに出ている家族や、地方の農村地帯、海外資本の繊維工場やバナナ・ゴ



Preah Vihear 県でゴミ拾いをしている麻疹ワクチンをしていない子どもたちを見つけて追う筆者



麻疹風疹ワクチンキャンペーン Stung Treng 県、ラオス国境の村で

ム・カシューナッツなどの農園労働者たちの困窮もこの国の今ある現実。この国で日本の1978年生まれのいち小児科医のぼんやりした小童が何ができているのかを3年経った今も模索する毎日です。



ブンペン、線路沿いの家々を回ってワクチンを供与

若い世代も育ってきているものの、虐殺の痛手で40代50代のリードする人材が圧倒的に不足しているのも確かなので、WHOの役割もベトナムと全く異なり、まさに手となり足となり、保健省の政策・予算づくりからサーベイランス・ラボデータ、ナショナルレベルの保健省スタッフのレベルアップや現地視察まで目まぐるしい日々です。カンボジアは、いち早いワクチンを導入を含め、コロナ対策で大成功を

収めました。私の異動後は、コロナワクチンからの定期予防接種の立て直し、5カ年計画の立案、去年の子宮頸がんワクチン導入、そして今年はワクチン実施とサーベイランスガイドラインの全国トレーニング、そして

麻疹の1年でした。麻疹は9月から報告患者が増え始め現在まで300例近くになる中、150万人の5歳未満の子どもを対象とした麻疹風疹ワクチン全国キャンペーンの準備をすすめ、この1ヶ月半は休みなくずっと地方を飛び回っておりました。ちょうど12月6日に終わり、98%の全国接種率と成功していますが、いくつかの接種率の低い県で追加キャンペーンをする予定で、年末までもうひと踏ん張りです。どうかこれで来年は麻疹が落ち着きますようにと願うばかりです。この国の人たちに少しでも寄り添って、ともに歩めるようにと。



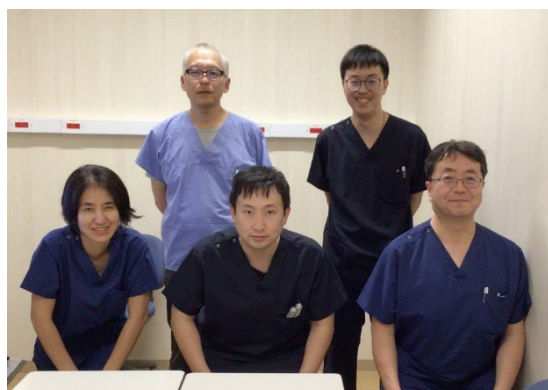
麻疹患者の調査

関連病院報告

ここ最近の海老名総合病院

海老名総合病院 小児科部長

藤武 義人(22回生)



私が当院に赴任して早3年が過ぎました。コロナ禍に小児病棟が28床から10床になり、昨年秋にできた新たな小児病棟に移動をして、やっと周囲の環境が落ち着いてきました。以前の病棟は大部屋と個室がそれなりの数があったので、感染症の隔離部屋が確保しやすかったのですが、現在は4人部屋が1室、2人部屋が1室、1人部屋が4室となりました。複数の感染症の入院が続くと部屋割りが上手くいかずに苦心してい

ましたが、病棟スタッフの協力のもと、うまく病棟運営が出来るようになってきました。それでも10床なので、満床近くになることが度々あり、近隣の先生方からの患者紹介に対応ができない時は大変申し訳なく思っています。現在、海老名総合病院周囲では、タワーマンションや中層階マンションの建設が立て続いており、また、ショッピングモールや交通アクセスが便利になり、若い家族連れをよく見掛けるようになりました。それと共に、小児科を標榜する医院やクリニックも増えてきました。ただし、海老名市での小児入院施設は海老名総合病院のみであり、周囲の医療体制を安定させるために当院の重要さは身にしみて感じています。外来診療は、月曜日から土曜日の午前中に一般診療を2~3診で行い、午後は専門外来を行っています。石倉教授には小児腎臓外来を、野々田准教授には小児神経外来を、高梨先生と本田先生には小児循環器外来を、根本先生には発育発達外来を、大津先生には小児内分泌外来をお願いしており、心強く思っています。また、常勤医では、佐藤先生と西田尚史先生がアレルギー外来を開設しており、気管支喘息や食物アレルギー患者の専門的な対応や入院による食物負荷試験を行うなど、当院小児科診療の主幹となっています。この様に臨床を行っていますが、もう一つ私たちが携わることとして、臨床研修医の指導があります。医師になり2年間の間に小児科診療を実習するのが必須となっており、当院はその研修施設でもあるため、ほぼ毎月1か月ほど研修医が私たちのチームに加わります。中には専門分野を小児科と考えている研修医がいるので、指導に力が入りすぎる時があります。また、そのような時は、北里大学病院小児科の魅力を伝えるため、研修期間に大学病院を組み入れたり、1日見学に行けたり出来るようにスタッフ一同思慮しています。

現在、小児科常勤医は5人となりましたが、外来診療および当直業務は大学病院など外部の先生方の力も借りて日々の診療および後進の育成を行っています。皆さんの期待に応えられるようにこれからも粘り強く努力していければと考えています。

追記 新病棟になってからさらにロマンスカーが身近に見えるようになりました。現在、全ての部屋から見る事が出来ます。とても素晴らしい事と思いますが、最近は乳児の入院が多く、その感動を共感できる子ども達がないのが残念な今日この頃です。





北里大学病院周産母子成育医療センター 小児 免疫・リウマチ班より

北里大学医学部 診療講師
江波戸 孝輔 (33 回生)

はじめに

私が北里大学病院小児科に入局した当時、免疫班では坂東由紀先生、緒方昌平先生、扇原義人先生が毎日熱いディスカッションを交わされており、リウマチ疾患をはじめ、すべての疾患を免疫学的に考察する姿に強く惹かれました。そんな魅力的な免疫班に憧れ、私は 2014 年に加入を決意しました。その後、扇原先生が 2016 年に、緒方先生が 2017 年にそれぞれご開業され、2024 年には坂東先生がご退官されました。しかし幸いなことに、現在は頼もしい 3 名の後輩（金子雅紀先生、芹澤陽菜先生、鈴木大輝先生）が加わり、また非常勤としてレジェンドである坂東先生にも引き続きご指導をいただきながら、日々診療に励んでおります。それでは、若さと熱意に満ちた免疫・リウマチ班の活動についてご紹介させていただきます。

臨床

免疫・リウマチ班では、これまでの歴史を受け継ぎ、川崎病を中心とした多様な免疫疾患・リウマチ疾患の診療を行っております。川崎病に関しては、近隣の医療機関のみならず、厚木市立病院など多くの施設から難治症例の紹介をいただき、年間約 40 症例を診療しています。最近ではシクロスポリンをはじめとした新薬が川崎病にも使用可能となり、治療の選択肢が広がっています。現在は芹澤先生を中心に、川崎病診療のプロトコルの見直しを行い、個々の患者の病態に合わせた治療を積極的に進めています。

リウマチ疾患においては、金子先生を中心に若年性特発性関節炎や全身性エリテマトーデスを主に診療していますが、最近では PFAPA 症候群や家族性地中海熱といった自己炎症性疾患も増加してきています。これらの疾患は決して多くはありませんが、一人ひとりの患者に対して丁寧に向き合う診療を心がけています（これは先代からの大切な教訓です）。その結果、慢性再発性多発性骨髄炎や Blau 症候群、家族性凍瘡様ループス、Hermansky-Pudlak 症候群など、まれな自己炎症性疾患や先天性免疫不全症の診断にもつながっています。

また、ここ 5 年ほどで新たに取り組み始めた分野としては、炎症性腸疾患や血液・凝固系疾患が挙げられます。炎症性腸疾患（潰瘍性大腸炎やクローン病）においては、消化器班の藤武先生や消化器内科の横山先生のご協力のもと、多くの症例を診療し、毎月のように消化管内視鏡を行うなどして診断・治療に当たっています。また、血液・凝固系疾患では、免疫性血小板減少症や溶血性疾患、凝固異常症など、腫瘍性疾患ではない血液疾患について、神奈川県立子供医療センターの血液・腫瘍科と連携しながら、積極的に診療を行っております。

国内留学

金子雅紀先生は2022年から約2年間、神奈川県立子供医療センター感染・免疫科で国内留学し、免疫疾患だけでなくさまざまな感染症の知識を深め、2024年に北里大学病院に戻ってきました。また、芹澤陽菜先生は子育てと臨床を両立しつつ、現在は同センターで非常勤医師として勤務し、勉強を続けています。

研究

今年から当院小児科が主体となり、「小児免疫性血小板減少症に対する抗 GPIIb/IIIa 抗体産生 B 細胞測定の有用性に関する多施設前方視的研究」を、関西医科大学附属病院小児科および北里大学医療衛生学部血液学と共同で開始しています。その他、以下の多施設共同研究にも参加しています：

- 原発性免疫不全症・自己炎症性疾患・早期発症型炎症性腸疾患の遺伝子解析と患者レジストリの構築 (JSIAD)
- 小児 SLE のシングルセル解析 (東京女子医科大学)
- 日本で診断された自己炎症性疾患の臨床情報に関する全国調査 (京都大学)
- 好中球減少患者における抗好中球抗体の検出と特性に関する研究 (広島大学)

最後に

「何かおかしいかも？」と思われる患者様がいらっしゃいましたら、どうぞ遠慮なく免疫班にご相談ください。日々、皆様への感謝の気持ちを忘れず、子どもたちのために精進し続けます。今後とも、皆様のご支援とご指導を賜りながら、診療に励んでまいります。

～Tea time～

バーダーな日々

みやげこども医院

三宅 泉



宮ヶ瀬のオオルリ

今考えるとコロナ禍のジョギング中に道端の野鳥が気になって双眼鏡を購入したことがきっかけでした。身近に多くの種類の鳥たちが共生していることを知り、気がつくと思遠カメラを抱えバーダーとして日々を送ること早三年。

経験値の高い先輩方には、「鳥だけでなく植物や虫などの地域の自然を日々観察し変化を追っていくのがいい」とか、「写真を撮ったりするよりも鳥の鳴き声を聞いて姿を想像するだけで楽しい」とか、おっしゃる方々もいますが、私はいまだに鳴き声を聞けば姿を確認したいし、できるだけ見たことのない鳥達に会い、写真に撮って残したい衝動に駆られ、山のような削除行き写真を撮りまくっています。

バーダーの頭の中は常に季節との追いかっけこです。彼らは一年を通して情報収集をしつつ今の時期に見るべき鳥達を思い浮かべ、地図と天気予報を見比べながら探鳥計画を立てています。(実はバーダーの多くは定年後の元気なシニア世代なのでほぼ平日午前中に活動します。とても勝ち目はありません。)



夏羽のノビタキ(ワッカ原生花園)



冬羽のノビタキ雌(相模川河口)

春はまだたどたどしいウグイスの初鳴きにはじまり、愛らしい冬鳥達と入れ替わっていつの間にかやって来た夏鳥達が囀り始めます。4月になると毎日のようにあちこちの森や林道で目撃されたオオルリ、キビタキ、コルリ、コマドリ、クロツグミなどの情報が SNS やメーリングリストに上がり、バーダーの焦燥感は一気に加速します。若葉の季節、至る所で鳥達は配偶者を探し、巣を作っては縄張りを主張し合っています。ホトトギスが鳴くころには巣立った幼鳥達がしばしば無防備に目の前に出て来てくれるので格好の被写体になります。親鳥が警戒の声をあげますが、あまり効果はありません。この時期は長野や北海道に足を延ばすバーダーも多く、私も今年はオホーツクまで行ってしまいました。コルリ探しに明け暮れている間に夏羽のノビタキを見逃してしまったためです。8月になると鳥達は囀りを止め山は静かになります。諦めてはいけません。富士山麓などの水場でじっと待っていればたくさんの鳥達がやってきます。海岸へ潮水を飲みにくるアオバトを観

るのもこの季節です。9月になりモズの高鳴きを聞く頃からハチクマやサシバなどの鷹の渡りが始まり(春よりも集中的に飛びます)、シギやチドリにも目を光らせ、バーダーは俄然忙しくなります。エゾビタキや冬羽に変わったノビタキを確認し、懐かしい冬鳥たちとの再会に胸をときめかせながら短い秋を過ごします。10月後半になり郊外ではジョウビタキからはじまりタゲリやカモ類が見られる様になります。アオジ、カシラダカ、シロハラやツグミが登場するころには概ね冬鳥も出揃い、身近でも鳥見が楽しめる季節となります。私としてはまだまだ未熟なバーダーで、苦労話も多々ありますが(千載一遇のチャンスに枝被りでピントが合わないとか)ここでは割愛させていただきます。ただまだ見たとこともない鳥が沢山ありこの歳で興味が膨張し続けているのはまあまあ幸せなことなのかもしれません。

晩春の林道での夜明け前の鳥達の大合唱や、頭上を渡る鷹の一群の陽に透ける翼、早朝の沖の浅瀬に群れるシギ達の影などドキドキする情景を求めて、何よりも偶然に助けられた多くの鳥達との一瞬の出会いのために、また今日もいそいそと出かけていくことになるのです。



団子になった巣立ち
直後のエナガの子達



白樺峠のハチクマ

2024 年度医局長報告

医学部小児科学 診療講師

医局長 昆 伸也 (30 回生)



師走の候、同窓会の皆様におかれましてはご健勝のこととお喜び申し上げます。平素より医局運営につきまして、多大なるご協力を賜りまして厚く御礼申し上げます。

小児科医局の近況について報告させていただきます。2024 年度は安藤颯真先生、笠松祐介先生、橋本知公先生、望月大輔先生の 4 名の先生方が入局してくれました。(写真①; 勧誘ポスター) 現在は 4 名とも大学病院内で小児科研修を開始しており、もうすでに重要な戦力として活躍してくれています。2025 年度からは関連病院に研修の場を移し、多くの common disease を経験して小児科医としてより成長してくれることと思います。また、2024 年 3 月末をもって 6 名の先生が小児科専攻医研修を修了致しました。それぞれが自分にとって理想の小児科医像を思い描き、サブスペシャリティや今後の自己研鑽のあり方を選択し、更なる活躍をしてくれることを期待しています。他の医局員に関しても、忙しい日々の診療のなかで、学会発表(写真②; 2024 年日本小児科学会学術集会の様子)や論文投稿などを積極的に行っており、諸先輩方の功績に続くように精進しております。

2024 年 4 月からは「医師の働き方改革」が始まり、医師の労働環境の変化が求められました。北里大学では「Dr. JOY」というシステムを導入しており、私たち医師はビーコンを携帯することで、院内のどこでどの時間滞在していたが分かり、そちらで勤怠管理も行っております。当直業務の翌日は帰宅するようにするなど業務時間が決められているにも関わらず、業務を維持するためには人員がまだまだ不足しているのが現状です。このことは関連病院でも同様であり、医局全体でなお一層の人員確保が求められております。また、子育て中の医師のキャリア形成をどのようにサポートして行くかも今後の重要な課題事項です。

課題が山積しておりますが、同窓会の皆さまから引き継いだ北里大学小児科の魅力さをさらに確かなものにしていきたい所存です。同窓会の先生方におかれましては、今後ともお力添えを何卒宜しくお願い致します。



写真①: 2024 年度医局勧誘ポスター



写真②: 2024 年日本小児科学会学術集会の様子

新入会員

北里大学病院 後期研修医 1年 安藤 颯真



2024年度より北里大学に入局しました安藤颯真と申します。専攻医となつてから半年ほどたちましたが、ご縁をいただき皆さまの一員として働くことを大変光栄に思っております。

私自身は生まれも育ちも愛知県で、名古屋大学を卒業したのちに安城更生病院で初期研修を行いました。初期研修はいわゆる「三次救急の市中病院」として救急外来を中心に様々な経験をする機会に恵まれましたが、かねてより関心があった周産期医療や発生学の分野への興味を充足させるために北里大学病院での後期研修を志望いたしました。この半年間、生活基盤

という意味でも慣れない面は多く、病院内の地図はようやく覚えられてきたものの横浜駅周辺ではいまだにスマホの地図が手放せずにいます。ですが、自分の足で歩き、探し、見て回ることによって段々と記憶に定着していくものなのだろうと楽観視しながら日々を過ごしています。

専攻医としては諸先輩方の知識と経験に圧倒される毎日ではありますが、論理的で一貫性のある思考や診療を目指していくことを信条として自分自身と、そして何より患者と向き合いたいと考えています。至らない点も多々あるとは思いますが、よりよい小児医療のために歩き、探し、見て回っていきたく思いますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

北里大学病院 後期研修医 1年 笠松 祐介



皆さま、はじめまして。北里大学小児科に新たに加わりました、笠松祐介と申します。この度、皆さまと共にお仕事をさせていただくことになり、大変光栄に感じております。

小児科医としてスタートして半年以上経過しましたが、患者さんであるお子さんだけでなく、そのご家族の支えにもなることができる、非常にやりがいのある分野だと実感しております。

私自身は、北里大学医学部を卒業後、藤沢市民病院での初期研修を経て当科へ戻ってきました。小児科医としてどの病院でスタートさせたい

かを考えたとき、慣れ親しんだ環境でできることのメリットが大きいと思ったのが理由です。学生の頃からお世話になってきた先生方とともに働けることはとても心強く、自分の選択は間違っていなかったと思っております。

私は、当科が持つ温かい雰囲気とチームワークを大切に、医師としてだけでなく、医療チームの一員としての責任を自覚し、日々努力していきます。また、患者さんとそのご家族に安心と信頼を与えられるような医師を目指して、常に知識や技術の向上に努め、皆さまにご指導いただきなが

ら成長していきたいと思いをします。

最後になりますが、未熟な点も多く、皆さまにご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、どうぞ温かいご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



北里大学病院 後期研修医 1年
橋本 知公

はじめまして。このたびご縁があり、小児科医局の一員としてお世話になることになりました、橋本知公と申します。この場をお借りして私自身について少しご紹介させていただきます。

私は東京都八王子市の出身で、高校は国際基督教大学高校 (ICU 高校) に通っていました。ご存じの方もいるかもしれませんが、ICU 高校は英語が得意で文系の子が多い学校でした。そういった環境にしながら残念ながら英語は身に付きませんでした。高校卒業後は2年間の浪人を経て埼玉医科大学に通い、その後も同大学で初期研修を修了しました。大学入学から8年間、医療人としての基本を教えてもらった場所でした。そんな中、同じ環境では自分に甘えが生じていると感じ、3年目の専攻医のタイミングで外に出る決断をしました。いくつかの小児科を見学させていただいた中で、幸いにも熱心な先生方が多いこの医局に迎えていただきました。小児科医としてスタートして半年ほどたちましたが、学ぶことの多い毎日で、自分の視野の狭さを痛感することの連続です。そのたびに、自分がどのように成長していくべきか、より良い医療を提供するためには何が必要かを問い直す毎日です。そんな私の大きな癒しと活力になっているのは1歳6か月になる息子とのひと時です。休みの日にズーラシアやこどもの国などで一緒に遊ぶ時間が自分が想像していた何倍にも楽しく幸せであり、驚きすら感じています。

子供たちの健康と発達を守るのと同時に、ご両親の不安に寄り添えるような小児科医になりたいと強く感じています。まだまだ若輩者ですが、先生方の経験や知識を吸収させていただきながら、自分なりに成長していけるよう努めてまいります。どうぞこれからよろしく願いいたします。



北里大学病院 後期研修医 1年
望月 大輔

はじめまして。2024年4月に北里大学小児科に入局した望月大輔と申します。私は大学、初期研修病院ともに北里大学で学ばせていただきました。大学5年生の病棟実習で小児科の良さを目の当たりにし小児科志望となり、研修で実際に働いてここで研鑽を積んでいこうと考えました。入局してから半年以上経っており、日々いろいろな症例を指導の下経験しております。まだまだ未熟ですが、これからご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。

会員近況報告

(年度初めの名簿記載事項確認の際に併せてお知らせいただいたものです。)

(50音順に掲載しております)

- 赤星 恵子：何年か前に書いた“発達障害”についてご家族向けに説明させていただいた本があるのですが、もしご希望であれば、無料でお送りいたします（何部でも可）のでおっしゃってください。
- 飯高喜久雄：なんとか仕事は続けております。
- 石井 正浩：65歳になりました。もう少しの期間頑張ります。横浜へお越しの際はお声がけして下さい。
- 中舘 尚也：ご無沙汰しております。北里大学小児科には1998年から2010年までお世話になりました。それから早14年が経ち、現在は、保育士と教員の養成大学に籍を置いています。「北里の精神」は忘れません。石倉教授のもと、北里大学小児科のますますのご発展を祈念いたします。
- 西田 陽：医学部同窓会の役員をもう一期 することになりました。皆さんの参加も是非願います。
- 西田 尚史：4年間お世話になった相模野病院から海老名総合病院に異動しました。引き続きご指導ご鞭撻の程何卒宜しくお願い申し上げます。
- 松浦 信夫：元気でやっています。帰道の最大の目的であった、1959-1996年に発症した1型糖尿病児521例（「北海道コホート」）の長期予後調査が完成し、Diabetology Internationalに理され、最近発行されました。
- 皆川 公夫：3月にロサンゼルスの子供と孫娘のところに2週間行き、ラスベガスなど見るべきところはすべて連れて行ってもらい、クルーズも楽しみました。毎日1万歩以上歩きました。ドジャーススタジアムも行きましたが、入れ違いのため残念ながら大谷は見れませんでした。今年度も仕事とゴルフ（下手ですが）頑張ります。
- 望月 美和：元気にしております。

総会開催報告

総務担当理事 坂東由紀

令和6年度総会は以下の日程で行われました。

日時；2024年6月15日（土）17：00～レンブラントホテル町田

新規入会者として4名の現役医師を含む44名が出席されました。

藤野会長のご挨拶に始まり、例年通り、事業・会計報告、次年度の事業計画・予算案の審議、同窓会基金の現況について担当理事から報告がありました。

医局報告として、小児循環器班 渡邊瑠美先生が国際学会で発表された演題を紹介していただき、奨励賞を受け取られました。

懇親会では新入局員4名の先生方が、個性的な自己紹介を披露し座が盛り上がりました。

世代交代の時期ではありますが、小児科医の温故知新の機会として、できるだけ医局員と同窓生が全国各地から参加していただけるよう努力いたします。



写真：総会后懇親会での様子



総会議事録

会員数 244 名（総会成立要件：会員数の 1/3=81 名） 81 名

総会議決承認要件：会員数の過半数⇒122 名

出席 44 名 委任状 105 通 合計 149 名 過半数の 122 名を超え総会は成立となりました。

【議事 1：2023 年度事業報告】

2023 年 10 月 名簿発行

2024 年 1 月 会報発行 (Vol. 28)

2023 年 6 月 3 日 第 1 回理事会開催 対面：ぽっぽ町田会議室

2023 年 8 月 2 日 第 1 回理事・評議員会 Zoom 開催

2023 年 8 月 19 日 総会・懇親会 Zoom 開催

2024 年 2 月 27 日 第 2 回理事会 Zoom 開催

会員数 (2024 年 3 月現在 240 名)

新入会員： 2023 年 4 月 1 日付 (敬称略)

岩井麻樹・坂口裕紀・宮本奈央子・山田茉莉子・米澤映里

退会会員： 栗田聖子

物故：伊藤民恵 (2023 年 5 月 3 日逝去)

事業内容について

- ・ 会員相互の親睦・懇親・互助関連
- ・ 大学医局若手支援
- ・ 会費納入に関する事項及び会員の異動等の掌握
- ・ 総会の企画・準備
- ・ 同窓会基金の運用
- ・ 小児科学会・小児科医会・相模原小児科医会との連携

小児科同窓会基金へご寄付いただいた先生方（2023年度）

緒方昌平先生 望月美和先生 大山宜秀先生 島本由紀子先生
扇原義人先生 山徳みゑ先生 武井研二先生 石倉健司先生
大熊浩江先生 松浦信夫先生 渡邊智子先生 朝長香先生
藤野宣之先生 佐藤雅彦先生 中村信也先生 田久保憲行先生
横田行史先生 坂東由紀先生

（お振込みいただいた順番で掲載させていただいております）
ご寄付をいただきました先生方、ありがとうございます。

事務局より お知らせ

★令和7年度小児科同窓会総会について

2025年6月14日（土）ホテルレンブラント町田にて

総会：17：00から 懇親会：18：30から（予定）

★お願い ～メールアドレスのご登録をお願いします。

通信費の削減のため、また迅速な連絡方法として、同窓会事務局からの連絡をメール配信へ移行しております。現在はメールアドレスのご登録がない方はfaxまたは郵便にて連絡をさせていただいております。この半年間で小児科同窓会からメールが届いていない方は事務局にてアドレスを把握できていないので、以下のアドレスまでメールをいただけますようお願い申し上げます。

あて先：kpdoso@med.kitasato-u.ac.jp 北里大学小児科同窓会事務局 澤木

★小児科同窓会基金へのご寄付も引き続きお願いしております。

⇒寄付控除も引き続き受けられます。

申請用紙が必要な方は事務局までメールまたはfaxにてご一報ください。申込用紙をお送りいたします。

mail：kpdoso@med.kitasato-u.ac.jp

Fax：042-778-9726 北里大学小児科同窓会事務局 澤木宛にお願いします

編集後記

小児科医にも様々な道があると思います。総合医、専門医、開業医、そして日本を飛び出している活動などなど。医師になってからの“人との出会い”でその道が決まるのだろうと今のご寄稿頂いた原稿から強く感じました。コスパやタイパを重視することが多い昨今、人を診ず、検査結果だけを診る医療が許されていますが、北里大学小児科で重要視されているのはそこではないかと安心しました。私が医局員だった時はとにかく忙しく、同僚と趣味の話に興じる時間はありませんでした。今回、同期のTea Timeの記事に、みんな医師以外の“人としての時間”があると改めて実感しました。働き方改革で自分の時間が昔より増えていることでしょう。“人を診る”北里大学小児科の伝統を次の世代に伝えたいものです。（広報担当理事：渡邊智子）

北里大学小児科同窓会事務局

〒252-0375 神奈川県相模原市南区北里1-15-1（北里大学病院小児科外来CR内）

TEL：042-778-8920（直通）FAX：042-778-9726

Mail：kpdoso@med.kitasato-u.ac.jp